清武町埋蔵文化財調査報告書　第14集

KAMIINOHARU

上猪ノ原遺跡－３－

SIMOINOHARU

下猪ノ原遺跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書

２００４

清武町教育委員会

序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農地保全整備事業に伴い、平成15年度事業地で実施した上猪ノ原遺跡・下猪ノ原遺跡の発掘調査概要報告書です。

今年度で９年目をむかえる本事業に伴う発掘調査では、九州でもあまり例のない縄文時代早期の玦状耳飾が出土しました。その他にも弥生時代の土壙墓などをはじめ旧石器時代から中世までの多種多様な資料が検出されました。

これらの成果は今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと考えられます。また、学校教育、生涯教育の資料や考古学研究の学術資料として広く活用され、埋蔵文化財保護への理解につながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なご協力を頂きました船引地区改良区をはじめとする地元の皆様に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成16年３月

清武町教育委員会

教育長　**湯　地　敏　郎**

例　言

1．本書は、県営農地保全事業（船引地区）に伴う、上猪ノ原遺跡第３地区及び下猪ノ原遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．調査組織は以下のとおりである。

調査主体　清武町教育委員会

事務局

教育長　湯地　敏郎

教育次長　小城　員久

社会教育課長　松元　一夫

社会教育課文化係長　伊東　但

調査員

社会教育課主任　井田　篤（上猪ノ原遺跡第３地区調査担当）

社会教育課主事　秋成　雅博（下猪ノ原遺跡調査担当）

社会教育課嘱託　冨田　卓見（上猪ノ原遺跡第３地区調査担当）

3．遺構図などの現地による図面の作成は井田、秋成、冨田、

（以上実測補助員）、若杉知和（宮崎大学学生）が行った。

4．遺物・図面の整理は清武町埋蔵文化財センターにて、井田、秋成、冨田、若杉、

が行った。

5．本書に使用した写真は井田・秋成・冨田が撮影を行った。

6．本書に使用した記号は以下のとおりである。

ＳＩ：集石遺構　ＳＣ：土坑（土壙墓・陥し穴状遺構も含む）

ＳＥ：溝状遺構　ＳＧ：道路状遺構

7．本書に使用した方位は磁北で、レベルは海抜絶対高である。

8．基本土層や遺構埋土等の色調は『新版　標準土色帖（1997年後期版）』の土色に準拠した。

9．本書の作成にあたって以下の方々から貴重なご指導とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

菅付和樹・藤木聡・松本茂・今塩屋毅行・丹俊詞・古屋美樹・柳田裕三（宮崎県埋蔵文化財センター）、松林豊樹・和田理啓（宮崎県文化課）、青山尚友・松田清孝（宮崎県立博物館）、桑畑光博（都城市教育委員会）、島田正浩・廣田晶子（高岡町教育委員会）、森田浩史・金丸武司（田野町教育委員会）（敬称略）

10．本書の執筆・編集は秋成（第１・３章）・冨田（第２章）が行った。

目　次

第１章　はじめに ―――――――――――――――― 1（秋成）
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　立地と環境 …… 1

第２章　上猪ノ原遺跡第３地区 ―――――――― 4（冨田）
第１節　調査の概要と基本層序 …… 4
第２節　遺構について …… 6
第３節　出土遺物について …… 10
第４節　まとめ …… 10

第３章　下猪ノ原遺跡 ―――――――――――― 12（秋成）
第１節　調査の概要と基本層序 …… 12
第２節　アカホヤ層上面の調査 …… 13
第３節　アカホヤ層下位の調査 …… 15
第４節　まとめ …… 22

調査抄録 ―――――――――――――――――― 24

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 － 2
第２図　遺跡周辺地形図 3
第３図　上猪ノ原遺跡第３地区基本土層模式図 4
第４図　上猪ノ原遺跡第３地区遺構配置図 5
第５図　上猪ノ原遺跡第３地区出土遺物実測図① － 8
第６図　上猪ノ原遺跡第３地区出土遺物実測図② 9
第７図　下猪ノ原遺跡基本土層模式図 12
第８図　下猪ノ原遺跡ＳＧ－１土層断面図 13
第９図　下猪ノ原遺跡ＳＣ－８及び出土遺物実測図 13
第10図　下猪ノ原遺跡アカホヤ層上面遺構配置図 14
第11図　下猪ノ原遺跡旧石器時代～縄文時代早期遺構配置図 16
第12図　下猪ノ原遺跡ＳＩ－８・20・27　ＳＣ－14・16実測図 17
第13図　下猪ノ原遺跡出土縄文時代早期遺物実測図 18
第14図　下猪ノ原遺跡出土ＳＲ－３及び旧石器時代遺物実測図 20

図　版　目　次

図版１　上猪ノ原遺跡第３地区全景 1
図版２　下猪ノ原遺跡全景 1
図版３　上猪ノ原遺跡第３地区基本土層断面 4
図版４　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＧ－２① 6
図版５　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＧ－２② 6
図版６　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＣ－８ 6
図版７　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＣ－５ 6
図版８　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＩ－53① 7
図版９　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＩ－53② 7
図版10　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＩ－53③ 7
図版11　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＩ－５ 7
図版12　上猪ノ原遺跡第３地区ＳＩ－50 7
図版13　上猪ノ原遺跡第３地区石斧出土状況 10
図版14　上猪ノ原遺跡第３地区出土遺物 11
図版15　下猪ノ原遺跡ＳＧ－１ 22
図版16　下猪ノ原遺跡ＳＣ－８ 22
図版17　下猪ノ原遺跡ＳＩ－８炭化物検出 22
図版18　下猪ノ原遺跡ＳＩ－20 22
図版19　下猪ノ原遺跡ＳＩ－27 22
図版20　下猪ノ原遺跡ＳＣ－14 22
図版21　下猪ノ原遺跡ＳＣ－16 22
図版22　下猪ノ原遺跡ＳＲ－３ 22
図版23　下猪ノ原遺跡出土遺物 23

第１章　はじめに

第１節　調査にいたる経緯

平成７年度より行われている清武町船引地区の県営農地保全整備事業に伴い、事業区の一部に上猪ノ原遺跡第３地区及び下猪ノ原遺跡が含まれることが確認された。遺跡の取り扱いについて宮崎県中部農林振興局と慎重に協議したところ、耕作土の確保等による事業設計上の理由により、遺跡の大部分がやむを得ず削平されることとなったため、影響を受ける範囲について発掘調査を行い、記録保存をすることとなった。

調査は宮崎県中部農林振興局の委託を受け、清武町教育委員会が実施した。各遺跡の調査期間は上猪ノ原遺跡第３地区（調査面積は約2000㎡）が平成14年11月21日から平成15年９月19日であり、下猪ノ原遺跡（調査面積は約7000㎡）が平成14年12月９日から平成15年12月24日であった。

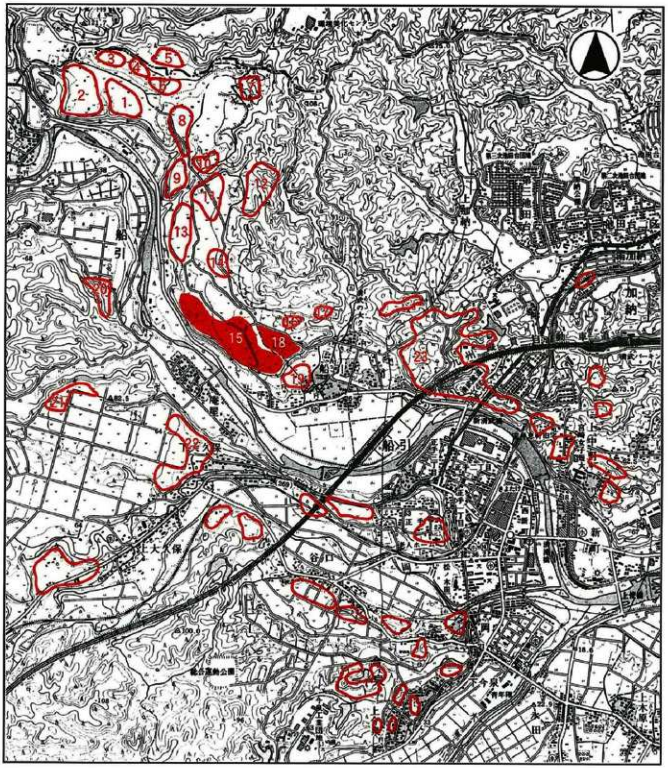
第２節　立地と環境

清武町は宮崎平野部の南西部に位置している。両遺跡は町の北西部の船引地区に所在し、町内を北西から東へ流れる清武川左岸のシラス台地状に立地する。上猪ノ原遺跡第３地区の標高は64m～63mで、下猪ノ原遺跡の標高は65m～63mである。

近隣には東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われた縄文時代後期や古墳時代中期の竪穴住居跡などが検出された上ノ原第１・２・３・４遺跡、古代の小規模な集落が確認された白ヶ野第２・３遺跡、県営農地保全整備事業に伴い発掘調査が行なわれた縄文時代早期の遺構・遺物が中心に検出されている白ヶ野遺跡・滑川遺跡・山田遺跡・坂元遺跡などが所在している。

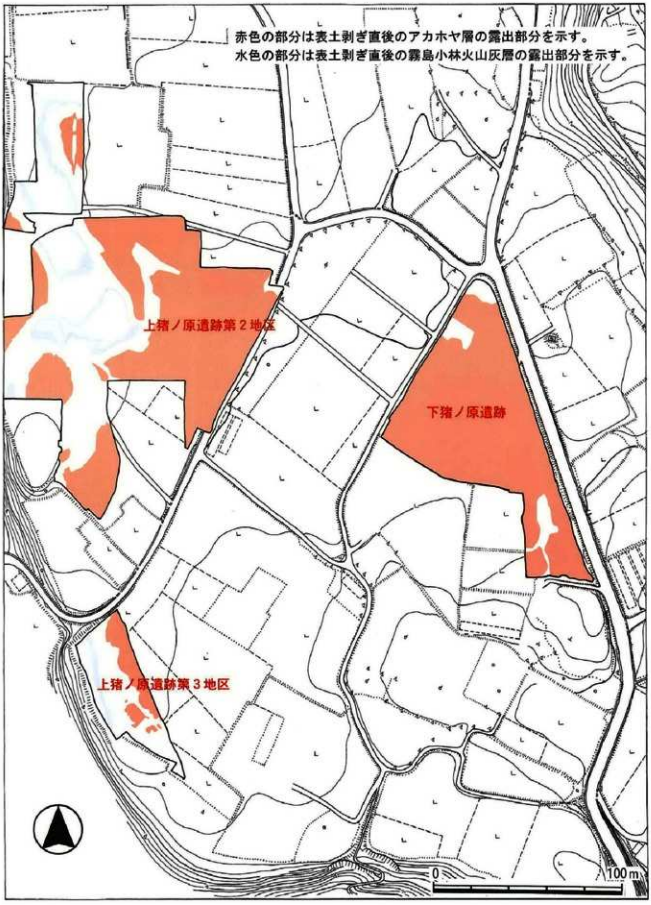
図版１　上猪ノ原遺跡第３地区全景

図版２　下猪ノ原遺跡全景



1．上ノ原第１遺跡　2．上ノ原第２遺跡　3．上ノ原第３遺跡　4．上ノ原第４遺跡　5．白ケ野第３遺跡
6．白ケ野第２遺跡　7．白ケ野第４遺跡　8．白ケ野第１遺跡　9．滑川第１遺跡　10．滑川第２遺跡
11．山田第１遺跡　12．山田第２遺跡　13．坂元第２遺跡　14．坂元第１遺跡　15．上猪ノ原遺跡
16．札立第２遺跡　17．札立第１遺跡　18．下猪ノ原遺跡　19．園田遺跡　20．権現原遺跡
21．杉木原遺跡　22．竹ノ内遺跡　23．清武城跡

第１図　遺跡位置図（S＝1/25000）



第２図　遺跡周辺地形図（Ｓ＝１/2000）

第２章　上猪ノ原遺跡　第３地区

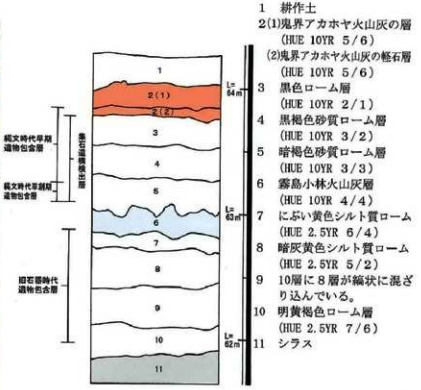
第１節　調査の概要と基本層序

当調査区は当台地上で南側の縁辺部に位置しており、本来は調査区の北側から南側に進むにつれ標高が高くなっていく地形であったが、昭和20年代に畑の造成が行われ、かなりの削平をうけた。よって重機で表土（耕作土）を剥ぐと、その下は第２層～第７層（当ページ右下の　第３図　上猪ノ原遺跡　第３地区　基本土層模式図　を参照、尚、今後　上猪ノ原遺跡　第３地区　の文章内で使用する層位についても同様）にかけて幅広く露出しており、調査区を南側に進むほど下位の層が露出している状況であった。

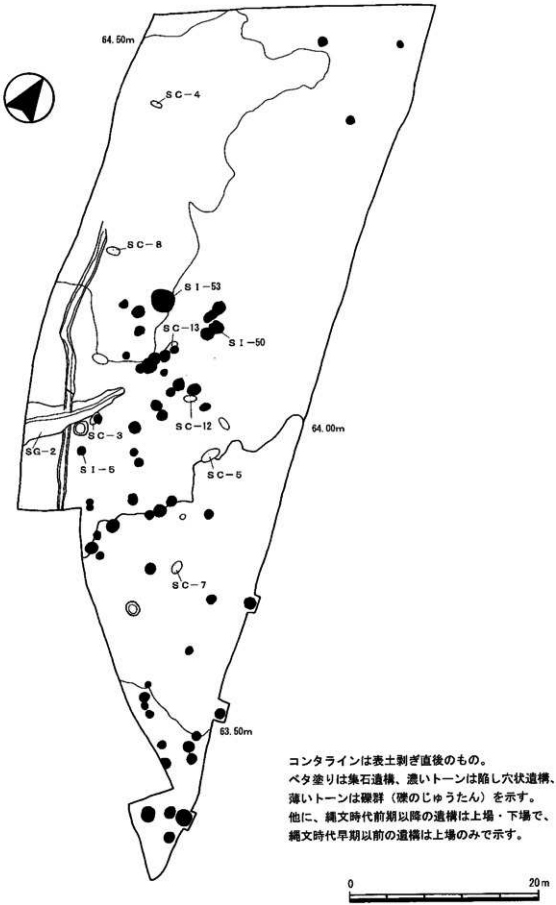
表土剥ぎ後、まず縄文時代前期以降の調査を行い、検出された道路状遺構や土坑の記録作業を行った。続いて、再び重機によってアカホヤ火山灰層（第２層）を除去、その後縄文時代早期・草創期の遺物や遺構が多く確認される可能性のある第３～第５層を人力で掘り下げ、検出された集石遺構や陥し穴状遺構、遺物などの記録作業を行った。

第３層～第５層の調査終了後、旧石器時代の遺物・遺構を確認するにあたって、当調査区内の旧地形で最も標高が高かった南側を中心にして数箇所にトレンチを設定し、霧島小林火山灰層（第６層）以下の掘り下げを行った。その結果、トレンチ内より旧石器時代の遺物・礫群などが確認され、記録作業を行った。

図版３　上猪ノ原遺跡第３地区
基本土層断面



第３図　上猪ノ原遺跡第３地区
基本土層模式図（S＝1/30）



第４図　上猪ノ原遺跡第３地区　遺構配置図（Ｓ＝１/400）

第２節　遺構について

■道路状遺構（ＳＧ－２）

表土剥ぎ後、調査区内南側の中央部に基本土層にはない茶褐色の箇所が見つかり、その部分の調査を行うと、最大幅4.6m・長さ11m・最深部1.9m（ともに検出面でのおおよその数値）の道路状遺構が検出された。

道路状遺構は、当台地南側の斜面に造られており、当台地上への登り降りの際に使用されていたのではないかと考えられる。

また埋土の土層断面において桜島文明軽石が確認されたことから、15世紀以前に造られたものと推測される。

図版４　上猪ノ原遺跡第３地区　SG-２①

図版５　上猪ノ原遺跡第３地区　SG-２②

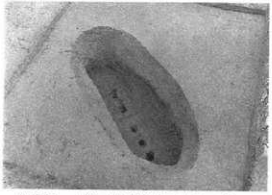
■陥し穴状遺構（ＳＣ-３・４・５・７・８・12・13）

アカホヤ火山灰層（第２層）下の縄文時代早期・草創期の包含層である第４層～第５層より７基検出された。

その内のＳＣ－３・４・７・８は、平面プランの形状や検出面から床面までの深さ、逆茂木の数（２～３本）、など似た特徴をもっている。またそれぞれが旧地形で最も標高が高いところである調査区の南側に約17mの等間隔で配置されていることから、これら４つの陥し穴状遺構は、同一の集団による計画的な狩猟の為に使用されていたと考えられる。

またＳＣ－５は、平面プランの形状が長楕円形をしており、掘り込みも上記のものに比べると浅く、逆茂木も直線状に５本備えられていることから、先述の陥し穴状遺構を使用していた集団とは別の集団によって造られ、使用されたものと考えられる。

図版６　上猪ノ原遺跡第３地区　SC-８



図版７　上猪ノ原遺跡第３地区　SC-５

■集石遺構

縄文時代早期の包含層である第３層から第４層を掘り下げていくと、合計58基の集石遺構が検出された。

集石遺構は、掘り込みの大きさ・深さ・形状、その掘り込みの中に含まれている礫の数、掘り込み内の埋土に含まれている炭化物の有無、掘り込みの床面に置かれる敷石の有無などの要素が組み合わさって様々なバリエーションで存在している。例えばＳＩ－５のように直径が１ｍ前後で掘り込みが浅く、礫も少量で敷石をもたないものや、ＳＩ－50のように直径が１ｍ前後で掘り込みが浅く、礫を多量に含み敷石をもたないものなどの集石遺構が確認されている。

また調査区の中央部と東端部では、第３層から第４層上位にかけて礫がじゅうたんの様に敷き詰められている箇所（礫群）が検出され、その礫を少しづつ外していくと中央部の礫群下からは20基、東端部の礫群下からは10基の集石遺構がそれぞれ検出された。中央部の礫群下からは、直径2.6m・掘り込みの深さが0.5mで敷石をもつ、当台地上でも最大級の集石遺構（ＳＩ－53）が検出されている。

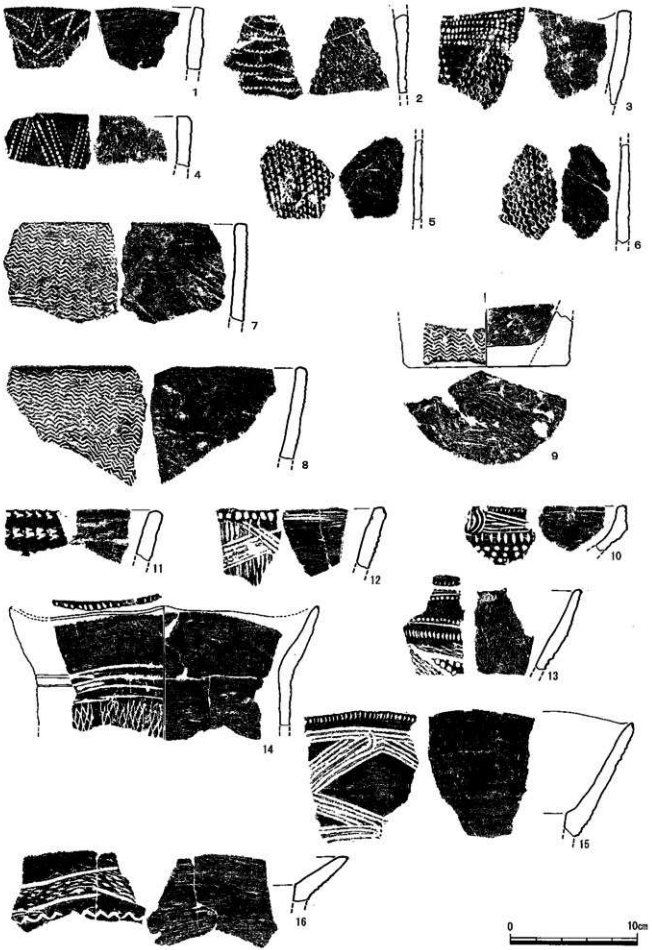
図版８　上猪ノ原遺跡第３地区　SG-53①

図版９　上猪ノ原遺跡第３地区　SG-53②

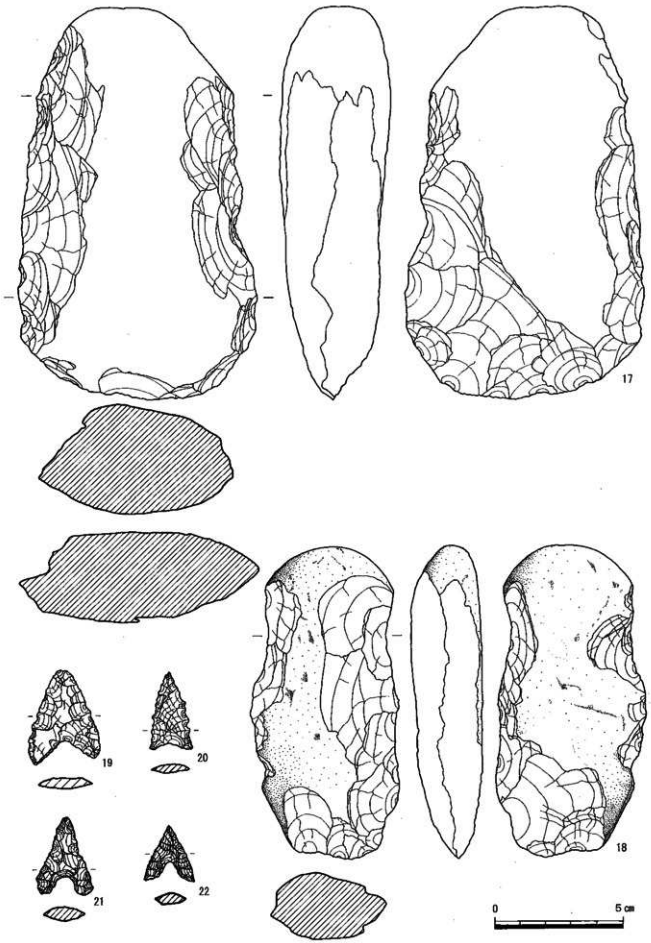
図版10　上猪ノ原遺跡第３地区　SG-53③

図版11　上猪ノ原遺跡第３地区　SI-5

図版12　上猪ノ原遺跡第３地区　SI-50



第５図　上猪ノ原遺跡第３地区　出土遺物実測図　①（S＝1/3）

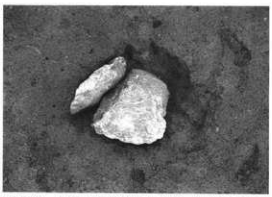


第６図　上猪ノ原遺跡第３地区　出土遺物実測図　②（S＝2/3）

第３節　出土遺物について

土器・石器ともに、縄文時代早期の包含層である第３層から第４層にかけて数多く出土しており、調査区全体の出土分布は、第３層・第４層ともに調査区の中央から東側で多く出土している。

層位でみてみると、第３層から第４層上位からは南九州の縄文早期後葉を代表する土器である塞ノ神式土器（11･13～16）が、第４層上位から中位からは縄文時代早期中葉の土器である下剥峰式土器（１～６）や押型文土器（７～９）の出土が目立った。塞ノ神式土器は、口縁部に数条の沈線文を施文しているもの（15）、沈線文による区画内を撚糸文で施文されているもの（16）、胴部に撚糸文を縦位に施文しているもの（14）などが出土した。なかでも１つの土器に、沈線文による区画内に撚糸文と平栫式土器の特徴である刺突文が施文されたもの（13）が出土していることは注目される。下剥峰式土器は貝殻復縁文を施文されたものが多く、その文様の種類も様々である。押型文土器は山形文のもの（７・８）が多く、円筒形土器の平底部分に施文されているもの（９）も出土している。



図版13　上猪ノ原遺跡第３地区　石斧出土状況

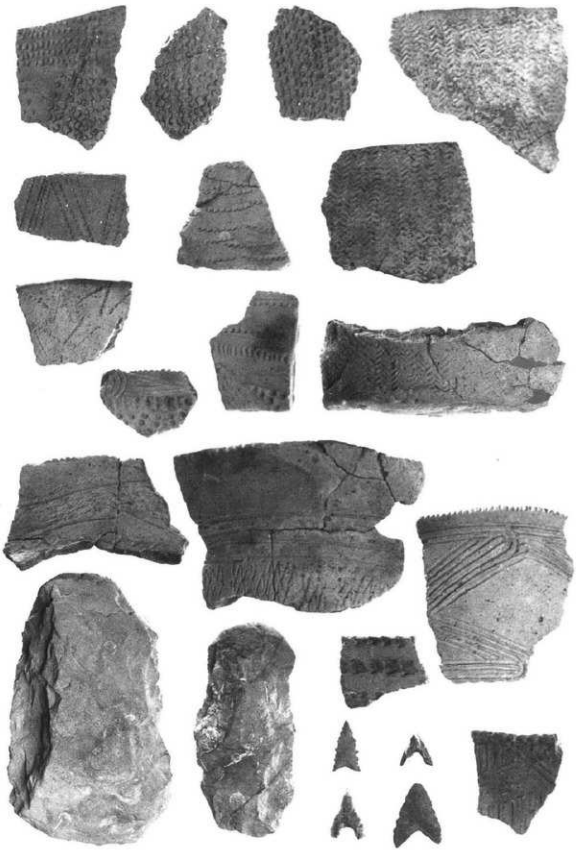
石器は石鏃（19～22）・打製石斧・磨石・敲石などが出土した。中でも調査区の中央部よりやや東側の場所からは、２本の打製石斧（17･18）が故意に埋められたのではないかと考えられる状態で、一箇所で揃って出土している。

第４節　まとめ

当遺跡の調査区は、昭和20年代に削平を受けていたが、アカホヤ火山灰層（第２層）下の縄文時代早期の包含層である第３層～第４層にかけては遺構・遺物ともに良好な状態で残されていた。また当調査区は遺構や遺物が多く検出される傾向がある台地の縁辺部に位置していることもあり、調査面積の割合からみれば遺構・遺物の分布密度は高かったと感じる。

今回の調査で出土した縄文時代早期の土器によって、この場所では縄文時代早期中葉から後葉にかけての幅広い期間にわたって人々が生活していたことがわかった。それは当台地のすぐそばには清武川が流れ、台地のあちらこちらに湧水地がある、など生活の為の好条件を備えていたからだと考えられる。

これまで当台地上で行われてきた他の遺跡の調査でも当遺跡から出土している土器と傾向が似ていることから、当遺跡だけではなく他の遺跡での遺構・遺物の調査結果も合わせて総合的に検討することが必要であろう。それによって縄文時代早期に当台地上で生活していた人々の、暮らしの全体像が見えてくることに期待したい。



図版14　上猪ノ原遺跡第３地区　出土遺物

第３章　下猪ノ原遺跡

第１節　調査の概要と基本層序

当遺跡の調査前は畑地であった。調査は重機による表土（耕作土）の剥ぎ取りから行った。表土を除去したところ、大規模な削平は確認されず、調査区の北部と東部以外では広い範囲でアカホヤ火山灰層が確認された。しかし、畑地の頃の小規模な撹乱坑が多数に存在しており良好な残存状況を呈してはいなかった。

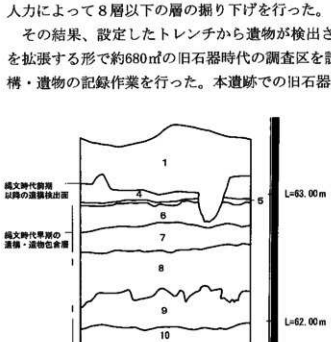
表土の除去後、一部黒色シルト質ローム層（２層）・褐色シルト質ローム層（３層：２次堆積のアカホヤ）が残っている部分もあったが、遺物等の混入もみられなかったため、この層まで重機で除去し、４層の上面において縄文時代前期以降の遺構の検出作業を行った。その結果、道路状遺構・溝状遺構・土壙墓・土坑等が検出されたのでこれらの記録作業を行った。

本遺跡でのアカホヤ層上面の調査面積は約7000㎡を測る。

４層上面での調査終了後、再び重機により４・５層を除去し６層を露出させ、鬼界カルデラ噴火直前の当遺跡の地形を把握するために６層上面において等高線の記録作業を行った。そして20ｍ×20ｍのグリットを設定し、縄文時代早期の包含層である６層～７層を人力により掘り下げを行ったところ、集石遺構や土坑などの遺構や塞ノ神式土器を中心とする遺物が検出されたので、それらの記録作業を行った。本遺跡での縄文時代早期の調査面積は約7000㎡を測る。

旧石器時代の調査については工事計画から調査区の東側を中心に行うこととなった。調査区東側は７層の調査終了後、旧石器時代の遺物の広がりを確認するために35本のトレンチを設定し、人力によって８層以下の層の掘り下げを行った。

その結果、設定したトレンチから遺物が検出されたので、調査区の東側では設定したトレンチを拡張する形で約680㎡の旧石器時代の調査区を設定し、平面的な掘り下げを行い、検出された遺構・遺物の記録作業を行った。本遺跡での旧石器時代の総調査面積は約2000㎡を測る。



1　耕作土
2　黒色シルト質ローム層（調査区のごく一部に残存）
3　褐色シルト質ローム層（調査区のごく一部に残存）
4　鬼界アカホヤ火山灰層（HUE 10YR 5/6）
5　鬼界アカホヤ火山灰の軽石層（HUE 10YR 5/6）
6　黒色ローム層（HUE 10YR 2/1）
7　黒褐色砂質ローム層（HUE 10YR 3/2）
8　暗褐色砂質ローム層（HUE 10YR 3/3）
9　霧島小林火山灰層（HUE 10YR 4/4）
10　褐色ローム層（HUE 10YR 4/6）
11　黄褐色ローム層（HUE 10YR 5/8）
12　黄褐色シルト質ローム層（HUE 2.5YR 5/3）
13　シラス

第７図　下猪ノ原遺跡基本土層模式図（Ｓ＝１/30）

第２節　アカホヤ層上面の調査

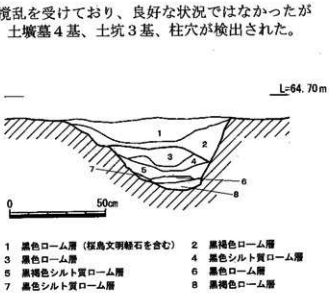
アカホヤ層上面は畑時の耕作などにより著しい撹乱を受けており、良好な状況ではなかったが遺構検出の結果、道路状遺構１条、溝状遺構７条、土壙墓４基、土坑３基、柱穴が検出された。

■道路状遺構（ＳＧ１）

ＳＧ１は調査区の東側を北西～南東方向に約50ｍの長さで検出された。検出面での幅は約0.7ｍ～1.3ｍで、深さ約20cmのところで硬化面が確認された。硬化面は幅約45cmで凹凸面が見られる箇所が部分的にあった。また硬化面は数枚存在していた。

硬化面の記録を取った後、さらに掘り下げを行い、掘り方の床面の検出を行った。最初の硬化面から約20cmのところで床面を検出した。床面の幅は約22cmで、硬化面と同様に部分的に凹凸面が見られた。

断面形は最初の硬化面までは緩やかなすり鉢状、硬化面から床面までは急に角度を変えていた。また埋土中には桜島文明軽石を含んでいた。

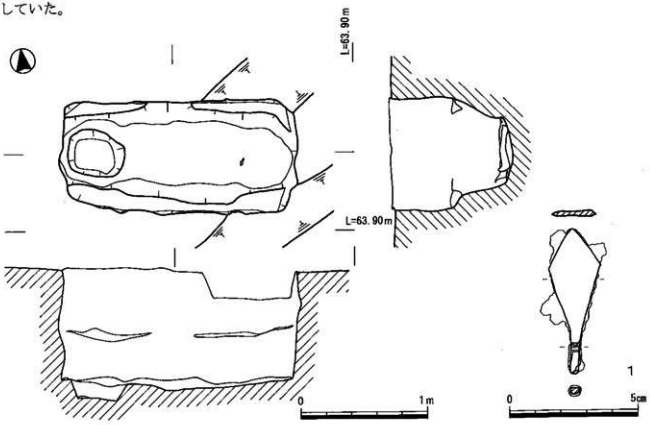


第８図　下猪ノ原遺跡ＳＧ－１土層断面図（Ｓ＝１/20）

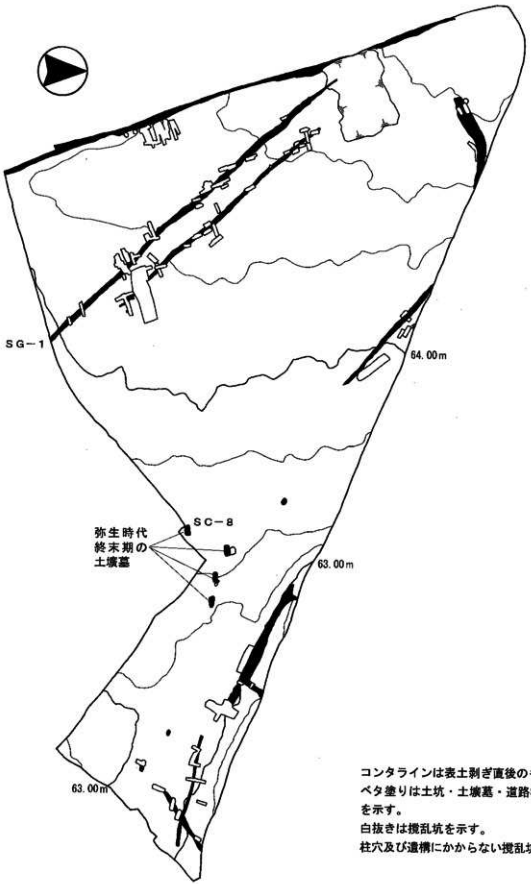
■土壙墓（ＳＣ８）

長さ1.82ｍ、幅0.89ｍ、深さ0.9ｍを測る長方形プランの二段掘りの土壙墓である。西側の床面には径0.4ｍ、深さ0.3ｍの不整円形の掘り込みが確認された。埋土中からは小片で図化に耐えない土器片が数点出土した。また床面からは鉄鏃が１点出土した。

１は圭頭形の鉄鏃で長さ5.75cm、幅2.6cm、厚さ2.5mm、重量4.8ｇを測る。茎部には木質が残存していた。



第９図　下猪ノ原遺跡ＳＣ－８及び出土遺物実測図（Ｓ＝１/30・２/３）



コンタラインは表土剥ぎ直後のもの。
ベタ塗りは土坑・土壙墓・道路状遺構・溝状遺構を示す。
白抜きは攪乱坑を示す。
柱穴及び遺構にかからない攪乱坑は省略している。

0　50m

第10図　下猪ノ原遺跡　アカホヤ層上面遺構配置図（S＝1/700）

第３節　アカホヤ層下位の調査

縄文時代早期の遺構は６層～７層にかけて集石遺構29基、７層にて陥し穴状遺構１基・焼土を伴う土坑７基が検出された。集石遺構は調査区東南部に集中して検出された。

６層～７層の遺物の出土状況は、調査区の東南部では面的にばらばらと遺物が出土し、特に集中して遺物が検出されるというところはなかったが、東南部以外のところでは遺物または炭化物・焼土が集中して検出されるという箇所が点在する状況を呈していた。

縄文時代早期の調査後、旧石器時代の文化層を確認するために各グリットの土層観察用のあぜに沿って幅１ｍのトレンチを設定した。また調査区東側には35本のトレンチを設定し、これらを人力で掘り下げ、８層～12層にかけての遺構・遺物の広がりを確認した。その後調査区東側では掘り下げたトレンチを拡張する形で旧石器時代の調査区を設定し、包含層の掘り下げを行った。

８層からは遺物はほとんど出土しなかったが、９層から12層にかけては遺物が多量に出土した。なかでも11層からの遺物の出土点数が最も多く、また５基の礫群も全てこの層から検出されているという状況である。遺物の平面分布をみると遺物が集中する箇所が各層とも似通っているという特徴があげられる。今後、これらの遺構・遺物が複数時期にわたるものなのか、11層を中心とするものなのかを各層の遺物や礫の接合関係を整理し、検討していきたい。

■集石遺構

ＳＩ８は７層にて検出された。礫の範囲は0.9ｍ×0.8ｍを測り、深さ0.4ｍの掘り込みの中にすり鉢状に詰まっていた。炭化物が検出時から目立っており、礫を実測して取り除いていくと炭化材が出現した。掘り込みは1.3ｍ×1.1ｍの不整円形プランを呈する。敷石はなく、礫の総数は707個で総重量は38kgを量る。

ＳＩ20は６層下位にて検出された。礫の範囲は0.75ｍ×0.85ｍを測り、深さ0.28ｍの掘り込みの中に掘り込みの床面から10cmほど浮いて浅いすり鉢状に詰まっていた。使用していた礫は拳大のものばかりであった。敷石はなく、礫の総数は519個で総重量は53kgを量る。

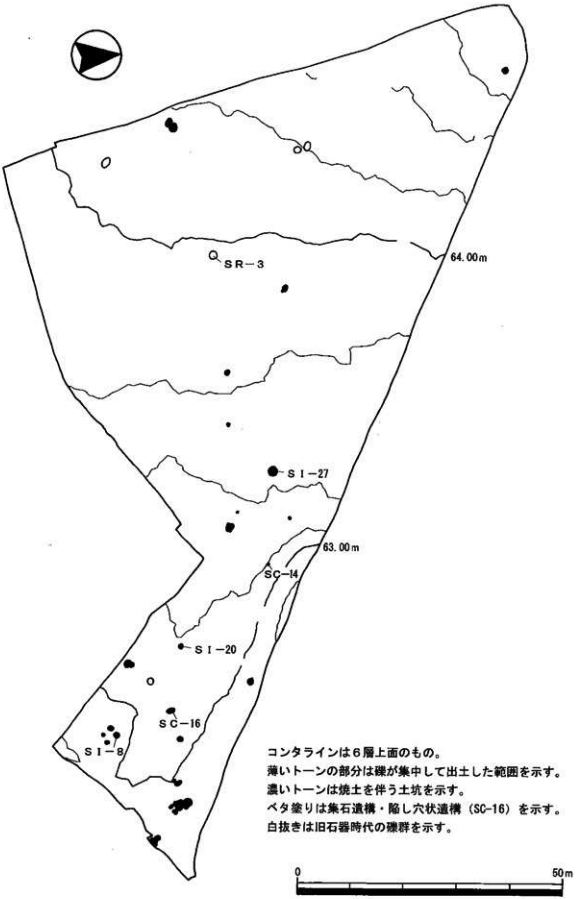
ＳＩ27は７層下位にて検出された。礫の範囲は2.2ｍ×2.4ｍを測り、礫の厚みは0.1ｍを測った。真ん中に拳大前後の礫が円形に集中しており、それより少し間隔をあけて人頭大以上の礫が不整円形に巡っていた。礫の総数は196個で総重量は56kgを量る。礫の実測後、トレンチを設定し、掘り込みの検出に努めたがその痕跡は確認されなかった。

■焼土を伴う土坑

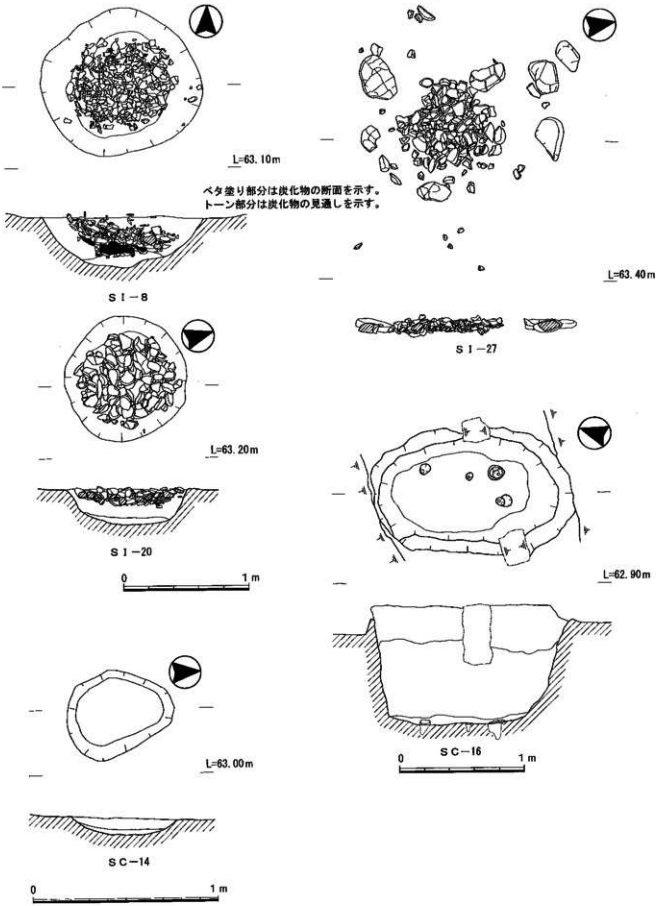
ＳＣ14の平面プランは７層中位にて検出された。しかし、５層中から炭化物や焼土がこの遺構付近から検出されていたので、５層中から掘り込まれていた可能性が高い。0.58ｍ×0.44ｍの不整楕円形プランを呈し、検出面からの深さは0.08ｍを測る。床面は焼けて赤化しており、埋土中にも焼土がぎっしりと詰まっていた。

■陥し穴状遺構

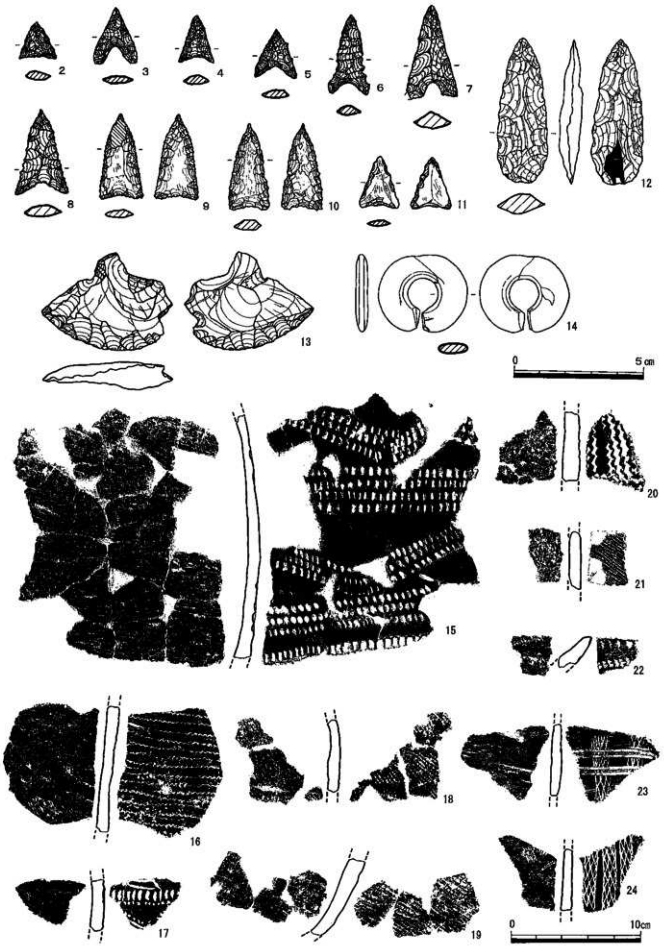
ＳＣ16は７層下位にて平面プランが確認された。土層観察用のあぜに引っかかって検出されており、土層観察からは６層上位から掘り込まれていたようである。1.6ｍ×0.98ｍの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは0.94ｍを測る。床面に逆茂木痕が４ヶ所検出された。



第11図　下猪ノ原遺跡旧石器時代～縄文時代早期遺構配置図（S＝1/700）



第12図　下猪ノ原遺跡SI-8.20.27.SC-14.16実測図（S＝1/30・1/20）



第13図　下猪ノ原遺跡出土縄文時代早期遺物実測図（S＝2/3・1/3）

■縄文時代早期の遺物

4・5・14・21は6層から出土した遺物であり、その他のものは7層から（または7層を中心に）出土した遺物である。

2～8は打製石鏃である。打製石鏃には様々な石材が使用されているが、中でも黒曜石・チャート・安山岩の使用割合が高い。9～11は局部磨製石鏃である。いずれも頁岩製であり、側縁部を鋸歯状に作りあげ、石鏃の厚みを減じるために体部の中央付近を中心に研磨を行っている。9・10の先端は屈曲しており細く尖る。11の研磨はかなり入念におこなわれ、両面に鎬が見られる。12はガラス質安山岩製の槍先形尖頭器である。周縁～尖端部にかけての調整はやや粗めだが丸みを持つ基部の調整は丁寧に仕上げている。13はチャート製の石匙で、幅広の斜め剥ぎの剥片を素材とする。主要剥離面を大きく残しているが刃部は丁寧に作っている。抉りは両面からの数回の加撃で作り出しており、剥片の打面をそのまま残している。14は蛇紋岩製で淡緑色を呈する玦状耳飾である。肉眼観察ではわかりにくいが、顕微鏡でみると擦痕が観察される。

15は2・3種類の施文具による横位の刺突を行い3条～4条の文様帯をつくり、器面全体に幾何学的な模様を施している。また、内面には粗いナデを施す。16は横位の貝殻腹縁刺突文を施す土器である。17は連点文や刺突文・沈線文を施す。18・19は外面に撚糸文を施した後ナデ調整をおこない、内面にはナデ調整を行う。また、断面には凹凸が見られる。20は山形の押型文を横位と縦位に施す。21は外面に貝殻条痕を施し、内面には粗いナデを行う。22は口縁部で、端部に刻み目、内外面に貝殻刺突文が見られるが、内面は施文後にナデ調整をおこなう。23・24は縦位に撚糸文を施すものである。23には沈線文も施されている。

■礫群（ＳＲ３）

11層にて検出された。礫は1.45m×1.56mの範囲に広がっていたが、積み重なっている状態ではなかった。その中には6点の石器（角錐状石器1点・スクレイパー2点・剥片2点・チップ1点）が含まれていた。礫の総数は46個で重量は8.6kgを量る。

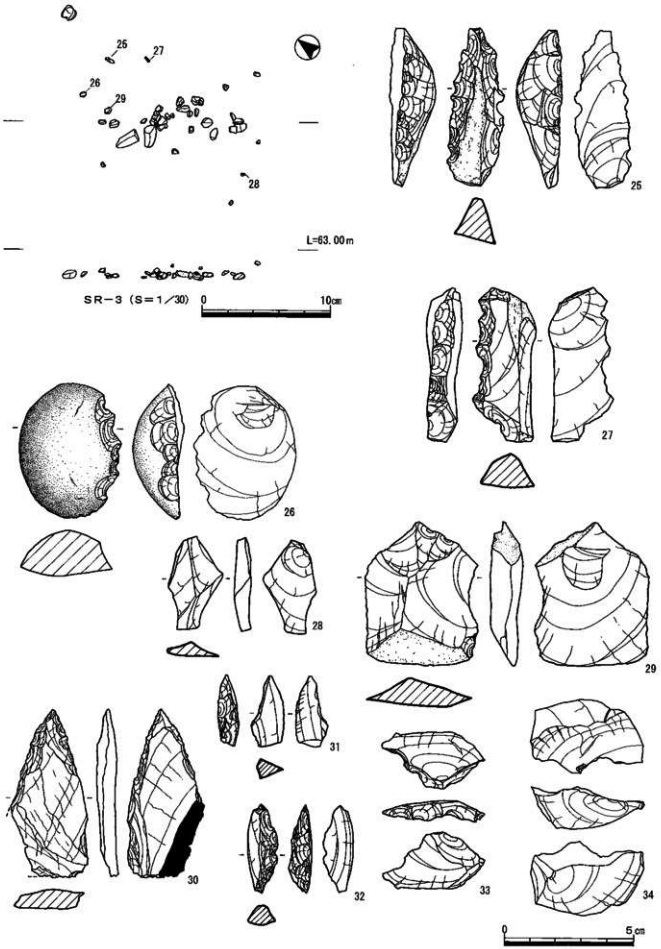
■旧石器時代の遺物

25～29は11層にて検出されたＳＲ－３の中から出土したもので、33は10層、30～32・34は11層から出土した遺物である。

25は頁岩製の角錐状石器である。背面に自然面を残しており、ややななめ剥ぎの母岩から早い段階で剥ぎ取られた剥片を素材とする。26は流紋岩製のスクレイパーである。幅広のファーストフレイクを素材とし、その片縁に主要剥離面側からの調整により刃部を作り出している。27は頁岩製のスクレイパーである。ななめ剥ぎの剥片を素材とする。28は流紋岩製のななめ剥ぎの剥片である。29は砂岩製のななめ剥ぎの剥片である。打面部に自然面を残す。

30は粘板岩製の槍先形尖頭器である。薄手の剥片に周縁加工を施し、全体の成形をおこなうが、基部には調整は届いていない。しかし、先端部分には入念に調整し、尖頭部を作り出している。

31・32は頁岩製の小型の国府型ナイフ形石器である。33は連続的に横長剥片を作出した痕跡が見られる頁岩製の横長剥片である。34は頁岩製の剥片素材の石核である。厚手の縦長剥片を素材としてその側面を作業面として連続的に横長剥片を剥ぎ取るものである。31～34の遺物はいずれも瀬戸内技法の影響を強く受けるものであり、今回の調査ではこの様な遺物ばかりが出土したブロックが一ヶ所検出されている。



第14図　下猪ノ原遺跡出土ＳＲ－３及び旧石器時代遺物実測図（Ｓ＝１/30・２/３）

第4節　まとめ

今回の調査でアカホヤ層上面の遺構については当台地上で類例のない土壙墓が4基検出された。土壙墓の時期については列状配置を呈することやＳＣ－８から出土した鉄鏃の形態から弥生時代終末期のものと考えておきたい。

また、道路状遺構の検出事例についても、上猪ノ原遺跡第３地区の道路状遺構と同様に埋土中に桜島文明軽石が観察されている。このことから、両遺構は同時期に存在した可能性も考えられ、両遺跡を通じての中世の復原は今後の検討課題である。

調査区の東南部以外の部分についての縄文時代早期の包含層における遺物の出土状況は、局部的に遺物が集中する箇所が点在するという状況であり、そこから出土した遺物については６層のものと７層のものが接合している。このような状況は、これまで当台地上で調査された遺跡の縄文時代早期の包含層での遺物の出土状況とは違う様相である。また、焼土を伴う土坑の検出事例や玦状耳飾という珍しい遺物の出土事例、包含層中の炭化物や焼土の分布等も検討の上、今後当遺跡の縄文時代早期の性格を明らかにしていかなければならない。

旧石器時代については今回図面等を提示できなかったが、９層～11層にかけて数点の角錐状石器や敲石と共に500点以上の剥片・砕片の出土した角錐状石器の製作跡と考えられるブロックが一ヶ所検出されている。また、旧石器時代の槍先形尖頭器は県内でも類例が少なく、層位からもこの資料はその初現にあたるものであろうと考えられる。使用石材や形態から鹿児島県下で散見される錦江谷型尖頭器と呼称されるものに類すると思われる。他にも瀬戸内技法関連の遺物が多量に出土したブロックも検出され、当台地上に見られなかった新しい成果を得ることができた。

下猪ノ原遺跡出土鉄鏃・石器・石製品計測表

番号	器種	出土地点・出土層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石材	備考
1	鉄鏃	SC－8	5.75	2.6	2.5	4.8		
2	打製石鏃	7層	1.45	1.5	4	0.5	黒曜石	
3	打製石鏃	7層	2.2	1.7	3	0.6	安山岩	
4	打製石鏃	6層	1.8	1.4	3.5	0.4	チャート	
5	打製石鏃	6層	1.9	1.6	3	0.4	安山岩	
6	打製石鏃	7層	3.15	1.5	3.5	0.9	黒曜石	
7	打製石鏃	7層	3.7	2	0.7	2.8	安山岩	
8	打製石鏃	7層	3.35	2.1	0.4	1.9	頁岩	
9	局部磨製石鏃	7層	3.4	1.7	3.5	1.5	頁岩	
10	局部磨製石鏃	7層	3.45	1.6	4	1.8	頁岩	
11	局部磨製石鏃	7層	2	1.6	2.5	0.7	頁岩	
12	槍先形尖頭器	7層	5.8	2	8.5	9.1	ガラス質安山岩	
13	石匙	7層	3.9	5.1	11	15.7	チャート	
14	玦状耳飾	6層	3.05	3.5	4	6.8	蛇紋岩	
25	角錐状石器	SR－3	6.3	2.2	18	18.6	頁岩	
26	スクレイパー	SR－3	5.4	4	20	40.7	流紋岩	
27	スクレイパー	SR－3	6.15	2.5	14	19.2	流紋岩	
28	縦長剥片	SR－3	3.7	2.1	7	3.6	頁岩	
29	縦長剥片	SR－3	5.7	4.5	13	27	砂岩	
30	槍先形尖頭器	11層	6.7	3	8	15	粘板岩	基部を一部欠損
31	ナイフ形石器	11層	2.8	1.3	8	1.9	頁岩	下半部を欠損
32	ナイフ形石器	11層	3.5	1.2	8	2.6	流紋岩	
33	横長剥片	10層	2.25	4.1	9	5	頁岩	
34	石鋸	11層	2.95	4.4	17	15.7	頁岩	

下猪ノ原遺跡出土土器観察表

番号	分類・部位	出土層位	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
15	胴部	6・7層				貝殻刺突文	粗いナデ	褐色	にぶい褐色	
16	下剥峰式	7層				横位の貝殻刺突文	ナデ	褐色	褐色	
17	平棘式	7層				連点文・沈線文・縦位の刺突文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
18	胴部	6・7層				撚糸文の後ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	
19	胴部	5・7層				撚糸文の後ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	
20	山形押型文	7層				山形押型文	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	
21	胴部	6層				貝殻条痕	粗いナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	
22	岩ノ神式	7層				横位の貝殻刺突文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
23	塞ノ神式	7層				沈線文・縦位の撚糸文	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	
24	塞ノ神式	7層				縦位の撚糸文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	

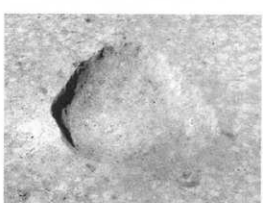
図版15　下猪ノ原遺跡ＳＧ－１

図版16　下猪ノ原遺跡ＳＣ－８

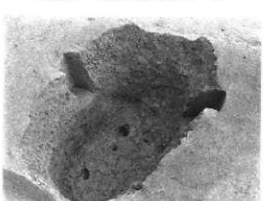
図版17　下猪ノ原遺跡ＳＩ－８炭化材検出

図版18　下猪ノ原遺跡ＳＩ－20

図版19　下猪ノ原遺跡ＳＩ－27

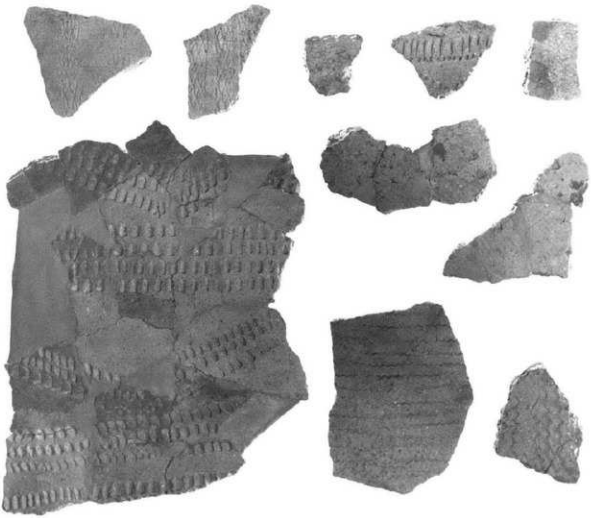


図版20　下猪ノ原遺跡ＳＣ－14



図版21　下猪ノ原遺跡ＳＣ－16

図版22　下猪ノ原遺跡ＳＲ－３



図版23　下猪ノ原遺跡　出土遺物

調査抄録

フリガナ	カミイノハル・シモイノハル				
書名	上猪ノ原遺跡－３－・下猪ノ原遺跡				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書				
巻次	第１集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第14集				
編集者名	秋成雅博・冨田卓見				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2004年３月				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東経	調査期間
上猪ノ原遺跡（第３地区）	清武町大字船引字上猪ノ原	清武町：205	31° 51′ 57″	131° 22′ 21″	2002/11/21～2003/９/19
下猪ノ原遺跡	清武町大字船引字下猪ノ原	清武町：204	31° 52′ 05″	131° 22′ 22″	2002/12/９～2003/12/24
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
2000㎡	農業関連	集落	旧石器・縄文早期・中世	集石・陥し穴・道路状遺構	塞ノ神式土器・下剥峰式上器・石斧・石鏃
7000㎡		集落・墳墓	旧石器・縄文早期・弥生・中世	礫群・集石・陥し穴・土壙墓・道路状遺構	鉢江谷型尖頭器・塞ノ神式土器・尖頭器・玦状耳飾
特記事項					
縄文時代早期の玦状耳飾の出土（下猪ノ原遺跡）。					